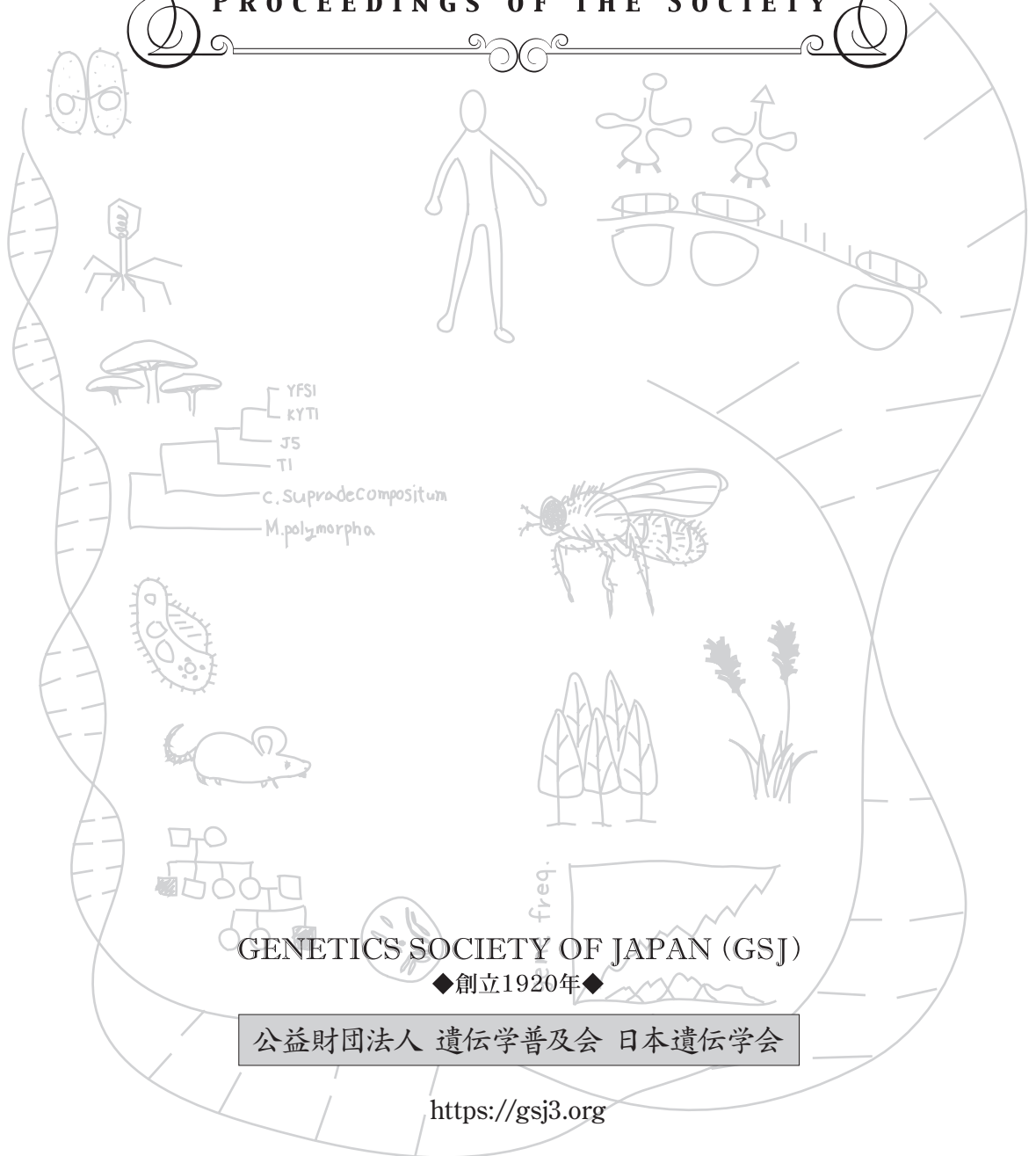


SUPPLEMENT TO GENES GENET.SYST.(2025)100(1) February 2025

# GSJ コミュニケーションズ

PROCEEDINGS OF THE SOCIETY



GENETICS SOCIETY OF JAPAN (GSJ)

◆創立1920年◆

公益財団法人 遺伝学普及会 日本遺伝学会

<https://gsj3.org>



目 次 頁

2025年度日本遺伝学会年会費ご納入のお願い ..... 3

日本遺伝学会第97回大会へのお誘い ..... 4

惜別 石和貞男名誉会員 2025/1/20ご逝去  
 近藤るみ ..... 5

日本遺伝学会木原賞および奨励賞候補者推薦のお願い ..... 9

2025年度日本遺伝学会木原賞候補者推薦書 .....10

2025年度日本遺伝学会奨励賞候補者推薦書 .....12

**本 会 記 事**

会員異動 .....14

## 2025年度日本遺伝学会年会費ご納入のお願い

平素より皆様には日本遺伝学会の発展に対し、いろいろとご支援を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、2025年度日本遺伝学会年会費を、下記郵便振替口座または、クレジットカード払いにてご納入下さいますよう、よろしくお願いいたします。

なお、年会費のご納入につきましては、当学会 HP (<https://gsj3.org>) の入退会・年会費の会費納入記録をお確かめいただきますようお願い致します。

普通会員	10,000円
学生会員 <sup>(注1*)</sup>	3,000円 (学生会員は初年度会費は免除)
シニア普通会員	6,000円
シニア永年会員	初回のみ 30,000円, 以降の年会費は免除
教育会員	2,000円

(注1\*) 学部学生と大学院生が対象です。学生であることが証明されました場合のみ、初年度会費が免除されます。

### ●郵便振替の場合

口座名義 日本遺伝学会

口座番号 00890-1-217316

### ●他の金融機関(ATM)から、ゆうちょ銀行の口座へ振込・振替をされる場合

\*\*\*\*\* 他金融機関からの振替口座番号 \*\*\*\*\*

・店名 ○八九 (ゼロハチキュウ)

・預金種目 当座預金

・口座番号 0217316

\*お手数料が別途かかります。

### ●クレジットカードご利用にて会費をご納入いただく場合

学会 HP (<https://gsj3.org>) の会員ページへアクセスして、クレジットカード支払 (VISA と MASTER) を選択して、ご入金手続きをお願いします。

# 日本遺伝学会第97回大会へのお誘い

日本遺伝学会第97回大会 大会委員長 菅澤 薫  
(神戸大学バイオシグナル総合研究センター)

日本遺伝学会第97回大会は、2025年9月10日（水）から12日（金）までの3日間、神戸大学六甲台第2キャンパス (<https://www.kobe-u.ac.jp/ja/site/access/>)において開催することになりました。神戸での大会開催は1985年以来、ちょうど40年ぶりとなります。現在、学会の支援をいただきながら大会開催に向けて鋭意準備を進めております。主要な情報は、大会ホームページ (<https://smartconf.jp/content/gsj97>)にて順次公開してまいります。

例年通り、大会プログラムは、シンポジウム、ワークショップ、一般講演（口頭発表）、ポスター発表（大学院修士課程以下を対象）によって構成されます。シンポジウム、ワークショップのテーマを公募しますので、どうぞ奮ってご応募ください。一般講演からの Best Papers (BP) 賞、ポスター発表からの Young Best Posters (YBP) 賞の選出もこれまで同様に行います。受賞者は大会最終日の総会で発表いたしますので、ぜひ多くの会員にご参加いただければと思います。

また、大会最終日の翌日、9月13日（土）には、公開市民講座「遺伝学が拓く古代生物の世界」を開催いたします。近年の遺伝学関連分野の潮流として、次世代シーケンサーなどの先端技術を基盤とする研究が急速な広がりを見せる中、過去に絶滅した生物のDNA解析に基づく研究の進展には目を見張るものがあります。本講座では、絶滅したニホンオオカミ、古代日本人の起源、マンモス復活計画、恐竜研究の新展開などに関する研究内容を、それぞれの専門家にわかりやすく解説していただきます。子供から高齢者まで、万人が興味を持つ「古代生物」をテーマに掲げ、遺伝学の魅力を一般市民に広く発信したいと思います。

ご存じのように、神戸は六甲山と大阪湾に挟まれた、大変眺めの良い街です。ポートアイランドで開催される学会に数多く参加された方でも、六甲山の登り口に位置する神戸大学のキャンパスに足を運ばれた方はそれほど多くないかも知れません。本大会のメイン会場（神戸大学百年記念館）からも神戸の街並みを見下ろすことができますが、ナイトゼミナールや懇親会では、山と海から神戸の美しい夜景を楽しんでいただける会場をご用意して、皆様の参加をお待ちしております。

ぜひとも多くの会員にご参加いただき、盛大で有意義な大会になるよう努めてまいりますので、どうぞよろしく願いいたします。

## 惜 別

### 追悼 石和貞男名誉会員

人の数だけ、才能はある。  
—美しい心を持つ科学者であれ—

お茶の水女子大学 近藤るみ

恩師、石和貞男先生を思い出すたびに、心がゆさぶられ、湧き上がる感謝の思いが涙となり頬を伝わります。人は心の中に生き続けるといいますが、こういうことを言うのでしょうか。私は、卒業研究から修士課程まで石和研究室に所属し、再び8年後に助手としてお茶の水女子大学に戻って、石和先生が退職されるまで研究室で同じ時間を過ごしました。このGSJコミュニケーションズも石和先生が遺伝学研究者のコミュニティの英知を結集する広報誌をつくる発案をして始まったものです。今、こうして先生を思い返すとき、先生の志の高さ、広く温かい優しい心、洞察力と機動力に改めて敬服し、先生が教授およびメンターとして、どれだけ素晴らしい学びの機会を与えてくださったか、心の底からありがたく思います。

先生は1936年7月8日に三重県津市で千種貞男として誕生されました。虫や草を求めて歩くのが好きな少年だったと聞いています。探検家で知られた木原均博士に憧れ、京都大学農学部農林生物学科に入学されました。そこで湯川秀樹博士の談話を聞き、「生命とは何かを追求することが生物学の面白さだと知った」そうです。しかし、木原均博士は1955年に京都大学を早期退職して国立遺伝学研究所の所長になられ、木原博士に師事した木村資生博士も遺伝学研究所で研究員をされていました。石和先生は1961年に京都大大学院農学研究科農林生物学専攻修士課程に進学され、遺伝学研究所の向井輝美博士の研究室でショウジョウバエを用いた生存力ポリゾーンの新生突然変異率を検討する研究に当たり、実験集団遺伝学の手解きを受けました。向井博士は木原研の先輩にあたり、Purdue大学



2002年 退職時の業績集より

でショウジョウバエを用いた雑種強勢の研究でPh.D.を取得し、遺伝学研究所変異遺伝部に着任されたところでした。その当時、先生は出版されたばかりの木村博士の著書『集団遺伝学概論』を繰り返し精読し、「生命とは何かを考えることと集団遺伝学が一致していることに感動した」そうです。学問の領域に入った喜びと好奇心で、一心に実験に没頭した大学院生の頃の先生が目につかびます。先生のエレガントで素早い手技は、腱鞘炎になるほどの膨大な量のショウジョウバエの表現型を集計したこの時に培われたのでしょう。

1961～1963年に木村博士がWisconsin大学のCrow博士のもとで再び研究された時、木原研出身の丸山毅夫博士がCrow博士の博士課程の学生となりました。さらに1965～1967年には、向井博士もCrow博士のもとで研究されています。海外に憧れていた先生も1963年にフルブライト奨学生として渡米、Purdue大学大学院博士課程で集団遺伝学を専攻され、遺伝研で知り合った妻の浩美さんも、後に同修士課程に入り学ばれました。先生が大学院を終える頃の1968年に木村博士が中立説を提唱され、「分子レベルでは進化速度が突然変異率に等しくなることを知った」そうです。先生はPh.D.取得後、North

Carolina State 大学遺伝学部の教授になられた向井博士の下で、ショウジョウバエ自然集団の遺伝的多様性維持機構の研究を行い、遺伝学研究所を経て、1969年11月にお茶の水女子大学理学部生物学科に着任されました。その後も向井博士との共同研究を継続しながら、生物進化の研究の新しい局面の真只中にある自分が何を成すべきか、中立説がもつ生命世界の意味を問い続けたと思われまふ。

お茶の水女子大学では新たに研究室を立ち上げ、学生の教育と研究指導に情熱を傾けられました。研究では、「生物種における遺伝的多様性と進化の研究」を中心課題とし、量的形質の遺伝から、トランスポゾン P 因子、キイロショウジョウバエ亜種群のミトコンドリア DNA、免疫系や化学感覚系の多重遺伝子族の分子進化と、常に新しいテーマに挑戦され展開されました。私が学生として石和研究室に所属した1986年～1989年は、P 因子の構造多様性と維持機構の研究とミトコンドリア DNA の伝達と分子進化の研究の両方を、助手の松浦悦子博士と推進されている頃でした。学外の研究機関の研究者との研究交流も活発で、学生が研究会に参加する機会も多く、大変勉強になったことを覚えています。

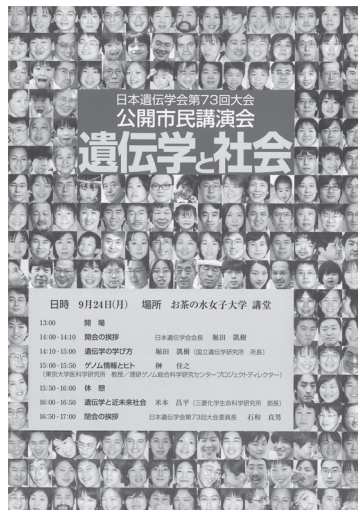
当時の先生は、恩師の向井博士と長電話で議論をするのが日課でした。丸山博士とも共著の研究があり、日本遺伝学会の活動や共同研究の打ち合わせで国立遺伝学研究所を訪ねるたびに、よくお会いしていたようです。しかし、1988年12月に丸山博士、1990年4月に向井博士を突然亡くされました。当時、木村博士から送られたカードが大切に研究室に残されています。それは、先生が7月に木村博士送られた葉書の返事で、温かい励ましとアドバイスが記されていました。その後、8月に先生は1週間の山旅にかけられ、その時の思いを北海道大学大雪山自然教育研究施設研究報告（1990年12月）に記されています。山を歩き、鳥の鳴き声に耳を澄ませた時、「そうだ、お前頑張るんだ。しっかり生きるんだ。天命というものがある、お前にはお前の天命がある。突然そうした思いが私の脳裡をかすめた。誰かが私をじっと見つめているかのようにもあった。」と、この時先生は、何を決意されたのでしょうか。

先生が丸山博士を亡くされた時は、私はカナダの大学院に留学中で、向井博士を亡くされた時は、総研大の博士課程に入学して、国立遺伝学研究所の寶来聰博士の研究室におりました。遺伝研では、すでに石和研の先輩の森山悦子博士が五條堀孝博士の下で、深海薫博士が館野義男博士の下で、颯田葉子博士が高畑尚之博士の下でそれぞれ研究をされていました。私が修士論文でショウジョウバエのミトコンドリア DNA の paternal leakage を検出した実験結果に、高畑博士がヘテロプラズミーの要因になる理論的な証明を加えて Genetics の論文にしてくださったのは、この頃のことでした。そして、1994年11月13日に木村博士も突然亡くなられました。その時私はアメリカにおり、前日に先生に Fax でポストク先の推薦状のご相談をした後、何も知らずに、叩き台を書いて送っていました。22日に先生は「私共一同悲しみのドマン中にいます。私共にとって心の支柱とも言える木村先生を失って悲しい限りですが、若者は常にこうした体験を経て成長してきたし、これからも先生をのりこえて学問も発展していくのでしょう。」という FAX と新聞記事を推薦状と一緒に送ってくださいました。そして今、私が先生の助手に着任した1997年9月に言われたことが思い返されます。「分子生物学の実験と分子進化学の解析の両方の経験を持ち、留学で得た語学力と国際的な視野を持つ母親として、また女子学生のロールモデルとして、君は貴重な存在なんだよ。これまで多くの先生の厚意と時間を受けてきたのだから、頑張らないといけません。」とおっしゃった言葉には、先生ご自身の師に対する強い思いと責任感が感じられました。また、「女性の科学者がただでさえ少ないのに、自分の研究室に留めたら、お互いに足を引っ張り合うことになるでしょう。それを避けるために、私はあえて学生をそれぞれ違う先生のもとで紹介しているんだよ。しっかり勉強しなさい。」とおっしゃった言葉にも、先生がお茶の水女子大学での女子教育に対して持っておられた責務と期待の大きさを感じました。先生の教授室のドアの面には木原博士の『The History of the Earth is recorded in the Layers of its Crust; The History of all Organisms is inscribed in the Chromo-



somes.』という言葉が貼られており、部屋の中には、木村博士がデザインされた手拭いと向井博士のポートレートが飾られていました。自分の師弟関係を大切に思う先生の思いを今、ひしひしと感じます。

先生は、現状には満足せず、些細なことでも常に改善を図る変革者でした。私が生物学科に着任した時にはまだ女性が会議中にお茶を入れる慣習がありましたが、学科長になった日にそれを止めさせました。先生は、大学内外で様々な委員を歴任されたので、私の知らないところでも改革をリードし、教育・学術振興に多くの足跡を残されたと思います。私が印象に残るのは、2001年の日本遺伝学会第73回大会で、先生が大会委員長として企画・運営に采配を振るわれた時の様子です。『21世紀の遺伝学』をテーマとして、目玉となる国際シンポジウム『21世紀・生命科学の時代と遺伝学』とフォーラム『ゲノム遺伝学の新世紀』を日本学術会議遺伝学研究連絡委員会との共同主催で行い、シンポジウムには Masatoshi Nei 博士、Jan Klein 博士、Sydney Brenner 博士（2002年ノーベル生理学・医学賞）、飯田滋博士、竹市雅俊博士、井村裕夫博士に講演を依頼されました。フォーラムでは石和研出身の森郁恵博士、国際サテライトミーティング『Genetic Diversity』では、石和研出身の森山悦子博士（米国）、颯田葉子博士（日本）と J. Klein 研の佐藤秋絵博士（独）が講演し、国際視点とジェンダーバランスを融合したプログラムの内容が印象的でした。さらに、公開市民講演会『遺伝学と社会』、公開シンポジウム『遺伝教育について考える』を行ったほか、一般講演に対しては『Best Papers 賞』を創設し、大会後に受賞者の研究成果を掲載した小冊子を発行しました。顔写真を募ってデザインした『遺伝学と社会』のポスター、総会・シンポジウム会場の生花・ピアノ演奏など、随所に先生のこだわりがありました。大会当日が暑くなる可能性も考え、一般講演会場には先生が私費でエアコンを設置されました。先生は、「また、靴を履き潰したよ。」と言いながら、寄付を募るために献身的に歩き回っておられました。退職後、2003年から2006年の4年間は、2期にわたって日本遺伝学会会長を務められました。



2001年9月公開市民講演会のポスター  
(石和先生は「遺伝」の文字の真下にいらっしゃいます。)

『Best Papers 賞』を定着させるなど、若手の研究奨励にも貢献されたと聞いております。先生の遺伝学の未来に向けた熱い思いに深く感銘します。その後、先生は2008年から2015年まで、日本生物学オリンピックの運営委員会委員長を務められ、高校生への生物学オリンピックの普及活動に尽力されました。特に2009年は日本が初めてつくば市で国際生物学オリンピックを開催するにあたり、先生の人脈を活かしながら、生物チャレンジという予選、特別教育やセミナー、日本代表者の選抜とトレーニング方法を改革され、私も関わる機会を与えていただきました。先生は、中高生に「努力なしに達成感はない。その達成感を皆さんに科学オリンピックで味わってもらいたい。そして、世界の高校生と共感してほしい。」「どれか1つの科目だけでなく、広い知識と興味を持ってほしい。そして、美しい心を持つ科学者になってください。」と熱く語られていたそうです。

こうして石和先生の歩みを振り返ってきましたが、最大の功績は、お茶の水女子大学で32年5ヶ月にわたり、女子学生の教育に情熱を傾けられた、教育者としての先生にあります。先生は Crow 博士門下の D. Hartl 博士のテキストである『集団遺伝学入門』『エッセンシャル遺伝学』などを監訳されていますが、ご自身の授業では決められたテキストは使われていませんで

した。先生は幅広い興味から常に多くの本を読んでいたからだったので、そのような本から興味深い話題を取り上げて、哲学的な語りによって学生の心をつかんでいたように思います。Crow博士の『クロー 遺伝学概説（木村資生・太田朋子訳）』の章末問題は特にお気に入り、よく宿題として出されていました。また、多くの非常勤講師を招いて、幅広い分野の研究者から最新の研究について話を聞く機会を積極的に設けてくださいました。科学が楽しいと思える刺激を与え続けることに力を注いでおられたように思います。

また、先生は学生達をもてなすことにも心を砕いてくださっていました。大学2年生の時に私の学年は、石和研の先輩達と共に勝沼でのショウジョウバエ採集とぶどう狩りに招待していただきました。また、先生が最後の担任となった学年が大学1年生の時には、全員が4年で卒業できるよう、正門前のインドカレー店に定期的に招待する『カレーの日』を設けておられました。その際、先生は黙って学生達の様子をご覧になっておられましたが、実際にクラス全員の絆を深め、安心感からモチベーションを引き出すことに効果的だったようです。研究室では、日ごろは学生達の自由に任せ、食べ物や小物をよく買ってくださって優しいのですが、研究をまとめる際には厳しい指導があり、その手綱の扱いが絶妙でした。研究室には科学に情熱をもった学生が多く集まり和気あいあいとしていました。『集団遺伝学入門』は後に博士となられた石和研の先輩6名が4年生と修士1年生の時に輪読した記録が元になっていますが、そのなかにはその後アメリカで研究者として活躍されている方々があります。また、過去に日本遺伝学会の木原賞を受賞した女性3名のうち、森郁恵博士と颯田葉子博士は石和研の出身です。そして、先生の薫陶を受けた多くの卒業生は、女性教育者・研究者ばかりではなく、様々な職に着き、また、母となって、次世代を育てています。先生が退職時におっしゃった言葉の通り、まさに“A teacher can never tell where his influence goes.”なのです。

石和先生を師とする先輩後輩たちの絆の一員であることを、私はとても誇りに思っています。

思い返せば、大学に入学して間もない頃、ただ海外留学したい一心で勇気を振り絞って先生のドアをノックしたことが、私の幸運の始まりでした。「まずTOEFLで高得点を目指しなさい」「大学院で留学しなさい」「心配しないで研究に専念しなさい」と言う先生の言葉が目標を明確にし、安心感を与えてくれました。そして、楽しそうに研究に取り組む聡明な先輩方を見習いたいと思ったのでした。私がまだ修士1年生の時に、『タマリン 遺伝学』に「謹呈 ご研究の発展を祈ります。立派な研究者になって下さい。」と書いてくださいました。もしかしたら、先生ご自身の経験と重ねられていたのかもしれませんが、留学から帰国して理学博士を目指すという時には、総研大の寶来先生を紹介くださり、ポスドク先が未定のまま乳児をつれて渡米する際には、「Natureはどこでも読めるから、勉強を続けなさい。」と励ましてくださいました。先生ご自身も共働き家庭であり、女性が子育てしながら働くことの重要性和難しさを深く理解しておられました。2児のシングルマザーになり、時間のやりくりに迷いがあった時には、「子供が最優先です。君には自分の子を育てる責任がある。」と言われたおかげで、覚悟ができました。日曜日に4歳の次男を研究室に連れて来た時には、先生は心配して息子の様子を何度も見に来てくださり、花や鳥の名前を聞いて話しかけ、肩車までして遊んでくださいました。先生は、力強くも優しい言葉をたくさんかけてくださり、無鉄砲な私をいつも温かく見守りつつ導いてくださいました。

『人の数だけ、才能はある。』は先生が退職時に業績集の表紙に選んだ言葉でした。広い心で学生と向き合ってくださいました先生は、ご自身が理想とする人間の姿を私たちに示し、「どのように生きたらいいか」を教えてくださいましたように思います。生物進化の哲学的意味を追求し、社会のあり方や私たちの生き方にも深い洞察を与えてくださった、美しい心をもつ科学者であり教育者でした。これまで本当にありがとうございました。

(石和貞男先生は2025年1月20日に88歳で逝去されました。先生のお墓は伊豆市下白岩の法住寺にございます。)



# 日本遺伝学会木原賞および奨励賞候補者推薦のお願い

下記の規程に添って2025年度木原賞および奨励賞候補者推薦をお願いします。

## 【推薦書作成要領】

推薦書は遺伝学会ホームページからダウンロードください。

(木原賞) 候補者推薦書 (Word), 主要な論文5編に丸印を付けた業績リスト (Word), 論文 (PDF) をメールの添付にて事務局にお送りください。

(奨励賞) 2010年から年齢制限はなくなりました。

1. 候補者推薦書 (Word), 主要な論文2編に丸印を付けた業績リスト (Word), 論文 (PDF) をメールの添付にて事務局にお送りください。
2. 自薦の場合も同様式に従って作成して下さい。

## 【提出期限】

**2025年5月29日(木) 必着**

提出先: [japgenet@nig.ac.jp](mailto:japgenet@nig.ac.jp)

\*なお、木原賞および奨励賞の受賞者には当学会誌 *Genes & Genetic Systems* に英文総説の執筆と、その年に開催されます大会で受賞記念講演をお願いしております。

## 公益財団法人遺伝学普及会 日本遺伝学会 学会賞および奨励賞に関する規定 (抜粋)

### 第1条 (目的)

遺伝学の進歩を促し、すぐれた研究業績を一般に知らせるために学会賞および奨励賞を設定する。

### 第2条 (賞の種類)

1. 日本遺伝学会木原賞  
遺伝学の分野ですぐれた業績をあげた者 (原則として会員) に授与する。
2. 日本遺伝学会奨励賞  
遺伝学の特定の分野ですぐれた研究を活発に行い、将来の成果が期待される会員に授与する。

### 第3条 (賞の内容)

1. 日本遺伝学会木原賞  
賞状、メダルおよび副賞としての賞金20万円からなる。
2. 日本遺伝学会奨励賞  
賞状および副賞としての賞金5万円からなる。  
尚、賞状の名義 (発行者) は“日本遺伝学会会長名”とする。

### 第4条 (賞の選考)

賞の存在が有益であるためには、公正適切な選考を行なうことが不可欠である。これを考慮して選考委員会の規程および選考方法を定めるものとする。

#### 1. 選考委員会

選考委員は、普通会員、シニア普通会員、シニア永年会員、学生会員を対象として評議委員会により選挙で選出された評議委員より3名、評議委員以外の会員より3名とし、これに会長を加えた7名が選考委員会を構成する。会長以外の選考委員は任期を2年とし、連続して2期(4年)をこえ選考委員としてとどまることはできない。選考委員の委員長は会長がつとめるものとする。選考委員は財団理事会の承認を得るものとする。

#### 2. 選考方法

会員から推薦された候補者について選考委員が慎重に審査を行い、受賞者を決定した上で評議委員会及び財団理事会の承認を得るものとする。日本遺伝学会木原賞受賞者については原則として各年1名とするが、適当な候補者がいない場合は授賞は行なわないものとする。日本遺伝学会奨励賞については各年3名以内を選ぶものとする。

### 附 則

昭和57年11月20日 日本遺伝学会総会承認

昭和60年10月14日 一部改正

昭和63年2月6日 一部改正

1989年10月14日 一部改正 日本遺伝学会総会承認

1992年10月23日 一部改正

2005年4月4日 一部改正 〈選挙方法〉および〈補足〉

2009年9月17日 一部改正 日本遺伝学会総会承認

2016年5月16日

この規程は、公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律に定める公益法人の変更認定申請に基づいて、定款の変更が成された日から施行する。

2019年9月12日 一部改正 〈選考委員会〉

2021年11月2日 一部改正 (学会賞および奨励賞に関する規定)

2022年9月16日 一部改正 第4条 (賞の選考)

# 2025年度日本遺伝学会木原賞候補者推薦書

2025年 月 日

推 薦 者	
(ふりがな) 氏 名	
職 名	
連 絡 先	〒 TEL: FAX: E-mail:

受 賞 候 補 者	
(ふりがな) 氏 名	(西暦) 年 月 日生
職 名	
連 絡 先	〒 TEL: FAX: E-mail:

【略 歴】
-------

受賞候補者（ ）氏の推薦理由等	
研究題目	(和文)
	(英文)
【推薦理由】	

注：候補者推薦書（Word）、主要な論文5編に丸印を付けた業績リスト（Word）、論文（PDF）をメールの添付にて事務局にお送りください。

提出期限： 2025年5月29日（木）必着

提出先： [japgenet@nig.ac.jp](mailto:japgenet@nig.ac.jp)

## 2025年度日本遺伝学会奨励賞候補者推薦書

2025年 月 日

推 薦 者 (自薦の場合、職名、連絡先は不要)	
(ふりがな) 氏 名	
職 名	
連 絡 先	〒 TEL: FAX: E-mail:

受 賞 候 補 者	
(ふりがな) 氏 名	(西暦) 年 月 日生
職 名	
連 絡 先	〒 TEL: FAX: E-mail:

【略 歴】	
-------	--

【遺伝学会における活動歴】	
---------------	--

受賞候補者（ ）氏の推薦理由等	
研究題目	(和文)
	(英文)
【推薦理由】	

注：候補者推薦書（Word）、主要な論文2編に丸印を付けた業績リスト（Word）、論文（PDF）をメールの添付にて事務局にお送りください。

自薦の場合も同様式に従って作成して下さい。

提出期限： 2025年5月29日（木）必着

提出先： [japgenet@nig.ac.jp](mailto:japgenet@nig.ac.jp)



◆ 会 員 異 動 ◆

新入会・再入会

田 中 浩	総合福祉研究所
程 木 義 邦	中部大学応用生物学部環境生物科学科
殿 崎 薫	横浜市立大学・木原生物学研究所
伊 藤 佑 (再入会)	大阪大学 大学院理学研究科 生物科学専攻
吉 野 博 貴	ベット遺伝子研究所
米 秀 之	東京大学大学院総合文化研究科
吉 田 翼	北海道大学農学部植物育種学研究室
唐 木 書 子	東京都立大学大学院 理学研究科 生命科学専攻 進化遺伝学研究室
並 木 彩 花	東京都立大学大学院 理学研究科 生命科学専攻 進化遺伝学研究室
横 澤 拓 馬	福井大学 工学研究科 生物化学研究室
武 田 七 緒	九州大学大学院システム生命科学府進化遺伝学研究室
齋 藤 貴 宗	近畿大学生物理工学部
日下部 将 之	神戸大学バイオシグナル総合研究センター
奥 大 河	九州大学理学部生物学科進化遺伝学研究室
今 井 裕 紀 子	国立遺伝学研究所 小型魚類遺伝研究室
篠 原 涼 介	熊本大学大学院 薬学教育部 創薬生命薬科学科 疾患モデル分野
鵜 飼 優 葉	福井県立大学院生物資源学研究科生物資源学専攻
泉 奏 良	高知工科大学環境理工学群
眞 下 武 丸	東京農業大学生命科学部バイオサイエンス学科
河 本 昂 星	岡山大学理学部生物学科
吉 田 洋 輝	東北大学大学院生命科学研究科発生ダイナミクス分野
平 川 莉 帆	お茶の水女子大学大学院生命科学コース
笹 田 健 太 (再入会)	近畿大学農学部生物機能科学科
立 花 誠	大阪大学大学院生命機能研究科
山 崎 朋 人	高知大学教育研究部自然科学系理工学部門
角 悟	立教大学 理学部 生命理学科
古 林 真 樹	東京大学理学系研究科
菅 川 和 貴	岐阜大学自然科学技術研究科
藤 冨 圭	東邦大学ゲノム進化ダイナミクス研究室
石 川 峻 遥	名古屋大学大学院生命農学研究科 ゲノム・エピゲノムダイナミクス研究室
T a H u o n g	国立遺伝学研究所・植物細胞遺伝研究室
佐藤 (永澤) 奈美子	秋田県立大学
堀 池 徳 祐	静岡大学 学術院 グローバル共創科学領域 総合科学技術研究科農学専攻
徳 富 智 明	川崎医科大学小児科学

(連絡先自宅のため不掲載)

市橋伯一, 萩野里奈, 辻愛莉紗, 山本春菜, 尋木ひかる, 柴田友美, 矢野智大, 北村颯太, 塩崎朋也, 森雪永, 金田侑貴, 金 暁丹, 谷口剛樹, 木村夏実, 表 美帆, 柴山莉奈, 白木美紗, 村松里紗, 遠山萌恵, 田原大翔, 井川紗里, 兵渡友誉, 小石原実玖, 金子倫也, 新屋虎太郎, 岸本隆希, 鳥山竜暉, Nguyen Ngoc Hong, 吉澤友甫, 山崎公平, 坂東 篤, 山口陽太, 島田栞里, 佐藤愛美, 平田都美, 鳩山雄基, 石飛隼人, 高木元斗, 山城芹奈, 高橋奏大, 立川幸樹, 福山恭永, 神野靖也, 松田成実, 加藤木高広, 中村魁斗, 山本歩夢, 手束 萌, 込山翔大, 若林妙恵, 野間健一

---

## 退 会

---

大西康平, 松谷咲采, 石川冬木, ゆはず真白, 稲村莉英, 久保貴彦, 木村優希, 郷 通子, 松本 緑, 堀田耕司, 生駒拓也, 竹村悠太, 野田大地, 八木優美香, 篠原日菜, 武市将義, 朴 潤姫, 笹田健太, 陳 文婷, 平 歩夢, 田中良晴, 布柴達男, Duri Tahala, 市田まなみ, 和田健太, 亀田淳生, 岩田 悟, 新井雄貴, 吉村早織, 本田晃誠, 山村 遥, 本田智子, 岡戸智明, 小林利紗, 水成友紀, 佐藤大典, 若杉理乃, 堀内凌太, 仲井理沙子, 関 冬弥, 寺田浩司, 金子隼也, 金田侑貴, 北村颯太, 阿部洋典, 五十嵐俊輔, 大圖美世, 古閑礼涼, 佐藤愛美, 采女優太, 島田栞里

---

## 訃 報

---

石和貞男 (名誉会員) 2025年1月20日にご逝去されました。享年88歳  
謹んで、哀悼の意を捧げます。

---

## 寄贈図書／交換図書

---

科学	Vol. 94	No. 4-12	(2024)
	Vol. 95	No. 1-3	(2025)
統計数理	Vol. 72	No. 1-2	(2024)

---

# (公財) 遺伝学普及会所属日本遺伝学会運営規則

公益財団法人遺伝学普及会(以下財団という)定款第38条、及び公益財団法人遺伝学普及会所属研究団体等に関する規程に基づき、当財団に所属することが認められた日本遺伝学会の運営については以下の通りとする。

- 第1条 所属団体としての名称は日本遺伝学会(以下本会という)と称する。
- 第2条 本会は遺伝に関する研究を奨め、その知識の普及を計ることを目的とする。
- 第3条 本会に入会しようとするものは学会ホームページから財団事務局に申し込む。
- 第4条 本会会員は普通会員、シニア普通会員、シニア永年会員、学生会員、教育会員、機関会員、賛助会員および名誉会員とする。ただし、年会費滞納が当該年度を超えて1年以上におよぶものは会員資格を停止する。
- 1) 普通会員は年会費10,000円を納める。
  - 2) シニア普通会員は、定年退職して常勤職でないことを申し出た者とする。以降の年会費6,000円を納める。会長および評議委員の被選挙権は有しない。
  - 3) シニア永年会員は、当学会に5年以上在籍する65歳以上の普通会員もしくはシニア普通会員が、初回のみ30,000円の永年会費を納入して資格変更でき、以降の会費および大会参加費の納入は免除される。会長および評議委員の被選挙権は有しない。
  - 4) 学生会員は、在学証明書またはそれに代わるものを提出することで、初年度の年会費を免除し、2年目以降は3,000円を納める。
  - 5) 教育会員は、小・中・高等学校等の教育機関の教員を対象とし、年会費2,000円を前納する。会長および評議委員の被選挙権は有しない。
  - 6) 機関会員は15,000円を、賛助会員は1口(20,000円)以上を納める。
  - 7) 普通会員、シニア普通会員、学生会員および教育会員が休職および海外留学をする期間の休会を申し出たときは、その期間中の年会費を免除する。
- 第5条 本会は次の者を財団理事会の決議により名誉会員の称号、あるいは特別功労賞を授与することができる。本会に功労のあった者、外国の卓越した遺伝学者。
- 第6条 本会は Genes & Genetic Systems を発行する。
- 第7条 本会は毎年1回大会を開く。大会は総会と研究発表とに分け、総会では会務の報告、規則の改正、運営委員候補者の選挙および他の議事を行い、研究発表は普通会員、シニア普通会員、シニア永年会員、学生会員、教育会員および名誉会員がする。大会に関する世話は大会委員若干名によって行い、大会委員長は財団理事会の承認を得て会長が委嘱する。大会は臨時に開くことがある。
- 第8条 本会は各地に談話会をおくことができる。
- 第9条 本会を運営するため運営委員として会長1名、幹事若干名、会計監査2名の役員、および評議委員若干名をおく。以下の手順で選出された運営委員候補者および評議委員候補者は全て財団理事会の承認を得るものとする。
- 1) 会長は本会を代表し、会務を統轄する。
  - 2) 会長は、評議委員が普通会員および学生会員の中から選出した複数の候補者から、普通会員、シニア普通会員、シニア永年会員、学生会員による直接選挙によって選出される。
  - 3) 評議委員は、普通会員および学生会員の中から、普通会員、シニア普通会員、シニア永年会員、学生会員による直接選挙で選出される。
  - 4) 幹事は、会長が推薦する候補会員を評議委員の過半数が承認することにより選任される。
  - 5) 会計監査は、会長が推薦する候補会員を評議委員の過半数が承認することにより選任される。
  - 6) 会長は評議委員会を招集し、その議長を務める。幹事は評議委員会に出席するものとする。
  - 7) 評議委員会は会員を代表して、本会の事業計画、経費の収支、予算・決算、学会誌の発行、大会の開催、その他重要事項について審議し、出席評議委員の過半数をもって草案を議決する。決議された事項は財団理事会の承認を得るものとする。評議委員会は全評議委員の3分の2以上の出席をもって成立とする。やむおえない事情の場合、委任状の提出あるいはオンライン参加も参加とみなすことができる。
  - 8) 会長ならびに幹事により幹事会を構成し、会長がこれを代表する。
  - 9) 幹事会は、本会の関連事項を論議し評議委員会に諮ると共に、会務を執行する。
  - 10) 会計監査は、本会の会計を監査する。
- 第10条 運営委員および評議委員の任期は2カ年とする。会長および評議委員は連続三選はできない。
- 第11条 本会の事務年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。
- 付則 この規程は、公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律に定める公益法人の変更認定申請に基づいて、定款の変更が成された日から施行する。
- 付則 平成29年9月12日に第6条を改正し、平成30年4月1日から施行する。
- 付則 平成31年3月8日に第11条を改正し、平成31年4月1日から施行する。
- 付則 令和1年9月12日に第1条、第5条、第6条、第7条、第8条、第9条を改正し、令和1年9月13日から施行する。
- 付則 令和2年9月18日に第9条を改正し、令和2年9月19日から施行する。
- 付則 令和4年3月31日に第3条、第6条を改正し、令和4年4月1日から施行する。
- 付則 令和6年9月6日に第6条、第7条を改正し、令和6年9月7日から施行する。

<p><b>Genes &amp; Genetic Systems 第100巻1号</b> 2025年4月10日発行 非売品 発行者 岩崎 博史 印刷所 レタープレス株式会社 Letterpress Co., Ltd. Japan 〒739-1752 広島市安佐北区上深川町809-5番地 電話 082 (844) 7500 FAX 082 (844) 7800</p> <p>発行所 公益財団法人 遺伝学普及会 日本遺伝学会 Genetics Society of Japan 静岡県三島市谷田1111 国立遺伝学研究所内</p>	<p>学会事務取扱 〒411-8540 静岡県三島市谷田・国立遺伝学研究所内 公益財団法人 遺伝学普及会 日本遺伝学会 https://gsj3.org (電話・FAX 055-981-6736 振替口座 00890-1-217316) 加入者名・日本遺伝学会</p> <p>国内庶務、渉外庶務、会計、企画・集会、将来計画、編集などに関する事務上のお問い合わせは、各担当幹事あてご連絡下さい。 乱丁、落丁はお取替えます。</p>
--	--